資料１

令和８年度仙台市いじめ防止等対策検証会議　学校教職員ヒアリング概要

１　実施状況

・９月９日（水）　仙台市立Ａ中学校　　氏家会長、大曽根委員
・９月 14 日（月）　仙台市立Ｂ小学校　　氏家会長、大曽根委員
・９月 16 日（水）　仙台市立Ｃ中学校　　本図副会長、村松委員
・９月 24 日（木）　仙台市立Ｄ小学校　　本図副会長

２　ヒアリング内容

【学校文化を生かしたいじめ未然防止の取組み】

	内容	委員所感
学校行事	○運動会、合唱コンクールだけでなく、予餞会に力を入れている。１・２年生が３年生から学校を引継ぎ、これから自分たちで学校を作っていこうという雰囲気が高まる。行事で学校のまとまりを作っている。これらの行事を通して伝統が受け継がれており、いじめ防止や学校全体の一体感につながっている。 ○昨年から、重点目標として、あったか言葉ときらきら行動で素敵な学校にしようという取組みを行っている。思いやりや真心という言葉は、開校当時から本校に伝わってきているので、日頃の指導、朝会などで発信を続け、こどもたちに伝わるようにしている。 ○縦割り活動として、運動会のすずめ踊りでは４年生が３年生に教え、よさこいでは６年生がメインになって５年生をリードしている。そのような文化があって、学校全体で取り組んでいる。 ○６年生が１年生のプールの世話をしたり、１年生が修学旅行のお守りを６年生に渡したりしている。５年生と６年生で野外活動と修学旅行の時にメッセージをやり取りしている。活動を維持するために意識しているわけではなく、自然と定着している。 ○上級生が下級生のために、どうしたらうまくいくのかを模索し、恥ずかしい気持ちもありながら、大きな声で頑張って説明している。こういった部分が、縦割り活動の良さだと思う。 ○今年やったものが、次の子たちに受け継がれていくところもある。そういったところも先生方同士で共有しながら、継承しており、今があると思う。	○行事を通してどのような学校文化や生徒同士の関係性を形成するかという視点が重要である。予餞会を重視し、3年生から1・2年生へ引き継ぐことで意識を高める取組は、生徒が学校の一員であることを実感し、他者と協力して一つのものを作り上げる経験となり、生徒同士のつながりや学校への所属感を形成する土台になり得る。この経験は、生徒自身が学校の担い手として主体性や責任を持つ機会にもなっている。（大曽根委員） ○学校行事を日常の学校生活における思いやりや真心を具体的な行動として学ぶ機会として位置付けている。学校の重点目標の継続的な発信は、いじめ防止に向けた価値観を全校で共有する上で意義がある。縦割り活動で、上級生は相手に合わせて教える、支える、励ます経験に、下級生は身近な先輩から学び、支えてもらう経験になる。（大曽根委員） ○縦割り活動は理想的であるが、うまくいかない時にどう対処するのだろうかと思った。（氏家会長） ○現在の取組を活用し、その上で効果的で効率的な拡張が目指されていると感じた。教師から、こども一人ひとりへの声がけが、こどもを見守っているというメッセージになる。こうした点の重要性について、校長が各教員に伝えようとしている。（本図副会長） ○予防・対応・育成を三本柱とするいじめ未然防止に関する活動が、学校行事をはじめ、日常的な教育活動に埋め込まれて展開されており、学校文化を形成していると思った。（本図副会長） ○良い文化ではあるが、いじめ防止にどう結び付けるか議論が必要かと思う。（氏家会長） ○いじめ防止の観点からは、学校のまとまりをどう捉えるかにも留意する必要がある。同じ活動が難しい生徒も含め、学校の一員であると感じられることが重要である。活動に参加しにくい生徒に対して、周囲の生徒がどう声を掛け、支えるかを考えているのは、重要な実践と感じた。望ましい学校文化とは、違いや苦手なことを表明しても、

	○今のクラスの状態を話したり、自由に使えたりする時間が少ない。放課後、生徒たちと普通の立ち話を教室でもう少しできたらいいなと校長が担任の時代から思っていた。その中で得るものもあるし、伝えられることもあり、コミュニケーションが取れる時間があればいいと思っていた。 ○この学校の伝統、文化として、意義があって継続できるものを継続していく。毎年新しいものをやっていく必要はない。例えば、挨拶運動で「おはようございます」を笑顔で言おうなど、今やっている活動でも十分コミュニケーション力は育つ。やらされるのではなく、やっていく意味を生徒も含め、みんなで考えている。 ○学校に「みんなで頑張ろう」という雰囲気があると、なかなかそこに入れなかったり、一緒に活動したりすることができない生徒も出てくる。だからといって、その活動をやめるのではなく、みんなと同じようにできない生徒にはどう声掛けするかを考えるきっかけにもなっている。様々な意味でこの文化はプラスの面が多く、引き継いでいくべきところが多いと思っている。	集団から排除されない文化だと思う。検証の際には、生徒同士のつながりや生徒の主体性がどのように生まれているか、行事に参加しにくい生徒も含めて居場所や所属感が保障されているかという視点が重要と考える。（大曽根委員） ○3 か月に一度、部活の時間を減らして、学級の話し合いの場にするという取組みで、一つの英断である。コミュニケーション能力の育成の一環と評価でき、クラスで担任が生徒と何気ない会話をする中でコミュニケーションの取り方を伝授していくことも含め、子どもたち同士のクラス内でのフラットな「横の関係」の強化につながるものと思わる。（村松委員） ○活動を単年度で終わらせず、次の学年へと引き継ぎ、教職員間でも共有している点にも注目したい。いじめ防止の取組は、特定の教員や担当者の努力だけに依存せず、学校全体の文化として継続されることが重要である。活動やその意義を教職員間で共有し、次の児童へ継承しているのは、持続可能な学校づくりという点で重要である。（大曽根委員） ○新しい活動を次々加えるのでなく、これまで学校で継続されてきた行事や活動の意味を問い直し、その価値を生徒と教職員が共有することが重視されている。（本図副会長） ○いじめに限らず、なじめない生徒への対応やその環境整備に、校外の方々が関わることは可能なのか。（氏家会長） ○こうした配慮を個々の生徒や学級の工夫だけに委ねるのではなく、全校で共有し、様々な参加の仕方を認める文化として定着させていく必要がある。それぞれの生徒が自分に合った形で学校行事や集団に関われる方法を考えていくことが重要である。（大曽根委員）
コミュニケーション能力の育成	○本校には自分の言葉で伝えようという風土がある。会や式などで発表者は原稿を作成するが、実際に話すときには、原稿なしで、人の顔を見て話しましょうというところを全面に出している。 ○授業などでも、まずはグループの中で伝えようという小さなところを積み重ねている。 ○毎週木曜朝、全校で「心つなぎタイム」を行っている。カードをクラスに配付し、友達の話を最後まで聞くというルールで、隣の人と話す。また、クラスの中を自由に歩き、会った人とお互いに話すゲームだったり、低学年だと好きなのどっちカードも配ったりして、隣の子と話す。	○いじめ防止の観点から考えると、コミュニケーション能力とは、自分が嫌だと感じたことや困っていることを言葉にする力、相手の思いを受け止める力、友達の困りごとに気づき、必要なときに声を上げる力でもあると考える。こうした力を、特別な指導ではなく、日常の授業や生徒会活動で少しずつ育てていることには意義がある。言葉にするのが難しい生徒もいることを前提に、周囲の生徒や教職員がその小さな変化やサインを受け止める環境と併せて育てていく必要がある。伝える力と受け止める力の双方を学校文化として育てることが、いじめの早期発見・早期対応につながるのではないか。（大曽根委員） ○こうした「使えるもの」の各方面への共有と、それを使いこなせる先生の紹介を広報する必要があるのではないか。（氏家会長）

	○コミュニケーションについて全校集会の時に生徒に話をしたり、校長のブログで発信したりしている。人の気持ちは伝わりにくい、言葉で話しても違った受け止めをされてしまうことを前提にした上で、ニコッと挨拶したことで、今日１日いいことがありそうだと思っていることを発信し、校長自身も笑顔で挨拶するようにしている。 ○１年生ではソーシャルスキルトレーニングやアンガーマネジメントに取り組み、カッとした時にはどうしたらいいかを考えさせたりしている。２年生では自分の考えを言葉で表現して、相手の言葉を理解する表現力が必要になってくる。３年生は何か言われてすぐ自己肯定感を低くしてしまわないよう、自分はこういう人間なんだ、相手はこういう人間なんだという、ある意味アイデンティティが確立していく時期でもあるので、たくましさを持ってほしいと考えている。 ○こどもの自己解決力を育てたい。いずれは６年生で卒業するので、何かちょっとあるたびに大人を頼るようでは、良くない。本当に困った時は頼ってもよいが、ある程度は自分で解決する力を養ってあげたい。そのためにも、コミュニケーション力を育てることを大事にしていて、挨拶や特別活動等で養っていくようにしている。保護者に関しても、納得しないまま事案が終わることがあるので、必ずその後の経過を伝え、こどもにも、１週間後に必ず声をかけ、どこが悪かったかという振り返りも必ずさせている。 ○１年生だと、どうしても小さいことからのトラブルはかなりある。２、３年生になると、小さなことは流せる力も出てくる。１年生ではそういった力がまだ十分育っておらず対応することになるので、認知件数が多くなる。 ○学年が上がるにつれて、自己解決力がついてきて、いじめ事案そのものについても減ってきている。自分たちで話し合いを行い、先生を介さないで解決したということも時々聞いている。	○友達の話を最後まで聞くルールを設けていることは、自分が話す力だけでなく、相手の話を受け止める力を育てる上で重要である。学年や発達段階に応じて、二択のテーマから、相手を変えながら対話する活動まで工夫されており、児童が無理なく人と話すことに慣れていく仕組みとなっている。いじめ防止においては、困ったことや嫌だったことを伝えられる力とともに、相手の気持ちや考えを聴き取る力も重要である。こうした活動を毎週継続することは、互いを知る機会を日常の学校生活に組み込む取組みとして重要である。（大曽根委員） ○各学年のそれぞれの特性を把握したうえで、コミュニケーションの仕方の課題を整理し、必要な情報を全校集会で話し、さらにブログでも発信し、全校生徒ひいては保護者にも届くよう、配慮している。このような配慮は、一人一人の生徒を大事にしていることを表しており、それは必ず、生徒保護者に通じていると思われる。同じように関係者を一人一人大事にし、一人一人に考えてもらうという校長の姿勢は、「笑顔のあいさつ運動の取り組み」に端的にみられ、「無理なく」「継続的に」実践できるものという観点で選択した上、実践者たち…地域の町内会長、主任、教職員そして生徒たち…にも、その意義を自分事として考えさせている。このような手法は、活用されるべき手法であると考える。（村松委員） ○挨拶の意義を理解することと、実際に挨拶する行為が循環するよう、様々な働きかけが行われている。校長による全校集会での講話、ブログによる生徒・保護者への発信、校長自身による日常的な挨拶等が相互につながり、コミュニケーションの大切さを「伝える」だけではなく、学校生活で実際に経験し、実践する機会がつくられている。（本図副会長） ○コミュニケーション能力を一律に捉えるのではなく、学年の発達段階に応じた対応や、進路への不安を踏まえた対応になっている。（本図副会長） ○１週間を目安に声をかけることは、関係性や場面から、そう簡単ではないのではと思ったが、登校時の校門での挨拶など、様々な機会を捉え、チームで対応しているとのことであった。三本柱において重要な対応である。（本図副会長） ○様々な生徒に対して自分の言葉で思いや考えを伝えることが学校に浸透している点は、いじめ防止の観点からも意義がある。自分の気持ちや考えを相手に伝える経験を積み重ねることは、異なる考えを持つ相手と関わる上でも重要であり、日常の人間関係の中で生じる行き違いや葛藤を、対話で解決していく力につながる。いじめ防止においては、自分の思いを伝える力だけでなく、相手の

		思いを受け止める力も必要である。「伝える」と「聴く」、「自分の思い」と「相手への思いやり」を両輪で育て、生徒が互いの違いや気持ちを理解しやすくなり、いじめを生みにくい人間関係の形成につながる。（大曽根委員） 〇対話的な活動を通して、児童が相手の考えや人となりを知る機会を積み重ねていることには意義がある。いじめ防止においては、考え方や好み、感じ方が異なることを前提として、それでも相手を尊重して関わることが重要である。相手を知ることを出発点として違う意見でもいいという認識につなげていることは、多様性を受け止める学校風土の形成につながる。伝えることだけに責任を負わせるのではなく、伝えられた側が受け止める環境が整っているかという双方向の視点から検証する必要がある。（大曽根委員） 〇自分が感じたことや困っていることを、自分の言葉で相手に伝える力が育まれている。様々な取組が奏功し、学年進行とともに、子どもたちの対応力、適応力が育っている。（本図副会長） 〇予防・対応・育成の三本柱の一貫で、自己解決力の育成を目指して、「なぜ？どうしたら？」をこどもたちに考えさせているのは重要な視点であると思った。（本図副会長）
学校独自の取組	〇生徒会が考えたトーキングキャンペーンという縦割りの交流活動を３年間続けている。１年４組から３年４組の生徒が縦割りで集まり、カードゲームや仲が深まるようなゲームをする活動で、いじめ防止を目的として続けている。 〇各学級で、今の学校でいじめ防止のためにどういう取組みが必要かということを話し合い、知らない人とも、もっとコミュニケーションを取った方がいいという意見が出された。それを受けて生徒会で考えた結果、縦割りで交流ゲームをしようということになった。 〇昨年、あったか言葉ときらきら行動のプロジェクトという取組みを児童会で行った。誰々さんにこういう風にしてもらって嬉しかった、助けてくれたなどと書かれたカードを廊下に貼り、こどもたちが見られるようにしていた。 〇本校では児童支援部という部会があり、通級の先生、児童支援教諭、学年部コーディネーター（担任を持たないで、低中高学年それぞれに関わり、様々なアドバイスや支援をする先生）、特別支援の主任、養護教諭、さ	〇とても意義あるものだと思うが、生徒会主導だと、うまくいかない時はどうするのかと思った。（氏家会長） 〇各学級で出された意見をもとに、生徒会が具体的な活動として縦割りの交流を企画している。生徒自身が学校の人間関係について考え、解決に向けて行動するという意味で、大きな意義がある。普段関わることの少ない他学年・他学級の生徒と交流する機会を意図的につくることは、知らない人から顔や人柄を知っている人へと関係性を広げる一つのきっかけになる。3 年間継続しており、学校文化の一部として定着しつつある。参加した生徒が実際にどのような変化を感じたのか、日常の人間関係にどのような影響があったかを確認することも重要と感じた。（大曽根委員） 〇児童会が中心となって仕組みをつくり、友達から受けた親切や支援を具体的な言葉として可視化している点が重要である。いじめ防止においては、問題行動を指導するだけでなく、互いのよさを認め、肯定的な関係を築くことが重要である。普段は見過ごしてしまいがちな友達の思いやりや助け合いを、児童自身が発見する機会となっており、自分の行動を誰かが見てくれている、役に立っているという感覚を育てている。個々の児童間の出来事を廊下に掲示して学校全体で共有し、思いやりのある行動を学校の文化として広げようとしている点も注目できる。（大曽根委員）

	わやか相談員、いじめ対策支援員、スクールカウンセラーなどが集まって、定期的にこどもの情報交換を行っている。 〇アンケートを年４回程度行っている。困っていることがあると答えた子については、友達・勉強・その他という追加の設問を設けて、これにチェックしたこどもに関しては、必ず聞き取りを行っている。 〇縦割り活動は心配な面もあると思うが、後輩が先輩から学ぶ意識は根強い。教師が入らなくても、３年生が優しく声を掛け、毎年活動することができている。 〇朝会の時に、友達のいいところがこんなにたくさんあったということで読んで聞かせている。書いた人も見つけた人もすごいねと言いながら、こどもたちがやる気を出して取り組めるように紹介している。児童会の先生が中心になり、こどもたちからやってみたいものを出してもらっている。 〇こどもたちが落ち着いて生活できるようになり、先生方に相談をする子が増えた。アンケートを年数回取っているが、その際、事前に相談したいことがあるという項目を設けると、相談しやすいと感じている児童も多い。 〇職員が入れ替わるので、油断するとすぐ落ち着かない状態に戻るという危機感は常にある。新しく赴任された先生などは、落ち着いている状態しか経験していない。常に油断しないようにはしているが、心配なところである。	〇ありがとうを大事に、相手の気持ちになって立ち止まる、などの一言が職員室前の廊下に掲示されていて、こどもたちが毎日目にする。簡潔な言葉で自分の思いを表現する力、作成時の自分に立ち戻り、自己管理していく力を養っている。（本図副会長）。 〇二者面談が年２回行われている。面談の目的は生活と学習全般に関することだと思うが、いじめ防止にもなると思う。（本図副会長） 〇心の健康観察も併用されている。多角的に子どもをみる、支援する視点がいじめ担当教諭から示され、チーム学校として、様々な方法で、いじめに向かわない子どもたちの姿勢や力を育てようとしていた。（本図副会長） 〇普段あまり関わることのない生徒同士が実際に話をする機会を意図的につくっている。こうした小さな接点を増やすことは、相手を知るきっかけとなり、学年や学級を越えた人間関係を広げることにつながり、上級生が下級生を支える文化が基盤になっている。今後、こうした生徒主体の取組を継続するとともに、参加しにくい生徒や縦割り活動に不安を感じる生徒にも目を向けながら、より多くの生徒が安心できる交流の場として発展させることが期待される。（大曽根委員） 〇こうした実践を成り立たせているのは、日ごろの濃厚な人間関係の成果と思うが、他校でもやれるのか。うまくいくためには、何か条件が必要なのかを検討したい。（氏家会長） 〇日常の中にある思いやりや助け合いを児童自身が発見し、学校全体で共有することは、肯定的な人間関係を育てる土台となり得る。児童をいじめ防止の取組の対象として捉えるだけでなく、学校をよりよくする主体として位置付け、児童の自己有用感や主体性を育てる機会にもなる。活動への意欲や「よいところ」の紹介件数だけを成果とするのではなく、普段あまり肯定的に評価される機会のない児童にも目が向いているか、児童が実際の学校生活で友達の変化やよさに気づき、声を掛けたり助けたりする行動につながっているかを確認することが重要である。児童の主体的な発案を尊重しながら、取組が特定の児童だけにならないよう、参加の仕方を広げていくことも課題と考える。（大曽根委員） 〇縦割り道徳も優れた活動である。教職員の学年を越えた協働があって成立している。全体的な生徒理解、生徒支援が可能になる土台になっていると推測できる（本図副会長） 〇ステーション、こころの相談室、図書活動のほか、廊下で植物を育てるなど、高額な費用を要するものからそうでないものまで様々な場面で心理的安全を確保する取組が日常的に行われていた。（本図副会長）

		○学習と心理的ケアを両立させる別室があり、個人の状況に寄り添う仕組みとなっており、いじめ防止に有益だと感じた。利用しやすいように、ごく普通の教室のような体裁や配置になっている。全教員が分担して担当することも、支援が必要な子どもを全員で把握していくことになり、効果的で効率的な仕掛けになっている。（本図副会長） ○課題がないと感じている職員の状態を課題と捉えており、働き方改革による様々な活動の簡略化のなかで、課題がないことになってしまったり、未対応のままでなんとなく過ぎてしまったりしたことが、結局は大きな課題として噴き出すという事態に示唆を与える認識と取組であると思った。（本図副会長）
地域と連携した活動	○コミュニティ・スクールに関連して、こどもを地域で見守る活動があり、50 以上の事業者に登録していただいている。主な活動としては、見守りや、防犯ポスター、標語コンクールなども開いてくれ、小学校と中学校で作品を集め、表彰式も行ってくれている。 ○学校運営協議会の人たちが４月に研修会を開いてくれる。その時に、これまで商店街で協力してきたことや、授業で取り組んだことを全部教えてくれる。そのときに今年度の取組みについて相談し、ご協力いただいている。 ○こういうこどもに育てたいと思った時に、地域の中に教材やアプローチの仕方が溢れている。普段の教科書以外のところから地域と結びつけるというのが恵まれていると感じている。 ○市民センターとタイアップして、10 月に防災教育を行う予定である。これは各学年でそれぞれ AED や、仮設トイレの設置を学んだり、以前勤務していた校長による講話を行ったりする。 ○中学生が防災について学んだことを地域の合同防災訓練で地域の方に教えるボランティア活動を行っている。地域の方と市民センターの方が主導でやっていて、中学生はボランティアとして参加している。 ○小中合同で挨拶運動を毎年行っていて、今度は地域を巻き込んで行う予定である。コミュニティ・スクールの熟議の時に、日常的な挨拶はなかなかできないという話になった。中学生が知らない大人に挨拶するのはハードルが高い。地域の高齢者は中学生が何人か集まっていると怖さを感じる場合があ	○いじめ防止の観点から考えると、学校内の人間関係だけにとどまらず、地域の様々な世代や立場の方と関わる機会を生み出す意味がある。生徒が地域の一員として役割を担い、誰かのために行動する経験は、自分自身の存在意義や社会とのつながりを実感する機会にもなる。また、地域の方々や警察など、学校の教職員や家庭とは異なる大人と接する機会が増えることは、生徒にとって相談できる相手や見守ってくれる人の存在を広げることにもつながる。学校内だけでは悩みを打ち明けにくい生徒にとって、学校外にも自分を知ってくれている大人がいることには意味がある。今後は、生徒の地域への愛着や他者との関わり方、学校生活への安心感等がどう変化しているのかにも着目したい。（大曽根委員） ○当該校だからできるのか、他校でもやれるものなのか、さらに、仙台市内の学校全般で考えた際に、困難な場合は何が障壁になるのか検討してみたい。（氏家会長） ○地域との連携は、地域が学校に協力的なことと相まって、長年、うまくいっているのだと思う。それを尊重し生かそうとする教師集団の姿勢も評価されるべきと考える。生徒たちは、地域で生きているのであり、中学３年間も地域の一員という位置づけが明確に与えられ続けられているということは、好ましいことと思う。（村松委員） ○児童が地域の方から話を聞いたり、商店街の方と継続的に関わったりする機会が、学年を通じて設定されていることは、多様な人との関係を築く機会になっている。こうした地域とのつながりは、児童を学校と家庭だけで支えるのではなく、地域の大人も含めて見守る環境づくりにつながる。地域の豊かな資源を、こどもを支える人的ネットワークとしてどう生かしていくかが重要な視点になる。（大曽根委員） ○他者と協働しながら前向きな価値を創造していくことが、学校内にとどまらず、地域住民、市民

	る。お互い怖さがあるから、なかなか挨拶できないので、朝の登校の時間帯はお互い挨拶をしてもいいということをそれぞれ発信し、地域で挨拶強化月間の取組みを行う予定である。 〇先日、中学生が地域でチラシ配りをした際、生徒に対して、卒業生の方が結構呼びかけてくれ、保護者も含め、地域的なつながりは多いと感じている。 〇ハロウィンは、元々、何かあった時にこどもたちが駆け込みやすいようにということで始まった。困ったらお店に来ていいだと入りにくいので、ハロウィンを通してお店に行ってみて、お菓子をもらって、声をかけてもらって、実際何かあったら来てねと言われると、こどもたちもまた行きやすい。 〇こどもたちは見守られているという安心感はあると思う。その部分で信頼関係ができている。地域の人たちや学校の先生との信頼感、そしてこどもたち同士というところで、すごく生かされている部分があると思う。 〇たくさんの大人が関わってくれている学校に、優しい大人に見てもらっているこどもたちが、悪さをする考えにならないと思う。いじめ未然防止という意味でも、何かあったら相談できたり、いつも見てもらったりしている。 〇本校では、何か新しいことを始めるときに、地域の方と一緒にやったり、打ち合わせが少なくても実現できたりするところは、先生方も助かっている。 〇あいさつ運動に関しては、そこまで負担にならない活動なので持続可能だと思った。何かイベントをやるとなると、準備や片付けなどが大変なので、先生方がそこに関わらないところが持続可能なものの一つの要素として考えていた。	センター、小学校、異年齢のこどもなど、異なる立場や世代の人々との関わりを通して多元的に行われている。活動の場や関わる相手を広げることで、生徒が多様な他者と関係を築きながら、自らの役割を見いだす機会を生み出している。（本図副会長） 〇中学生が学校で防災について学んだことを地域の合同防災訓練で地域住民に伝えるなど、生徒が教えられる側から地域に働きかける側へと役割を広げている。（本図副会長） 〇挨拶運動についても、単に挨拶を励行するのではなく、「中学生から見た地域の大人」「地域の高齢者から見た中学生」という双方の感じ方や心理的な距離に着目している。コミュニティ・スクールを有効活用していることも示唆的である。（本図副会長） 〇昇降口の前に学校地域支援本部を置くことは、地域の人たちとこどもたちが顔を合わせたり、声をかけてもらったりしやすいようにする工夫の結果だと感じた。（本図副会長）。 〇学校の歴史と所在地のつながりは、いじめ防止で大きな役割があると感じられる。（氏家会長） 〇自分を見てくれたり、学校生活を気にかけたりしてくれる大人が学校外にもいることは、こどもたちの安心感や地域への所属感を育む上でも意味がある。卒業生が在校生に声を掛ける関係は、単なる地域貢献にとどまらず、学校の文化や経験が世代を越えて受け継がれることにもつながっている。（大曽根委員） 〇こどもが困ったときに駆け込みやすい関係を平時からつくる目的でハロウィンを始めた点は意義がある。学校・地域・こども同士のそれぞれに信頼関係が形成され、安心感につながっている。いじめ防止においては、こどもが困った時に相談できる環境をあらかじめ構築しておくことが重要であり、地域との継続的な関係はその基盤となり得る。地域とのつながりが、実際にこどもの相談行動や早期発見、学校への情報共有につながっているかを確認することが今後の課題となる。また、地域からの新たな提案を教職員の過度な負担を増やさずに実現できている点も重要であり、地域連携を持続可能なものにする仕組みが重要である。（大曽根委員） 〇働き方改革や持続可能性を踏まえた、継続性の高い取組となっている（本図副会長）
異校種間連携	〇中学校の陸上部が、近隣の小学校へ陸上記録会に向けた練習に行って指導している。 〇学区内に大学があり、学校の運営に協力いただいている。 〇近隣の学校で授業をお互いに見せ合っている。また、夏休み期間中には中	〇中学生が教わる側から教える側へと立場を変える貴重な機会になっている。いじめ防止の観点から考えると、異なる年齢のこどもたちと関わることで、相手の立場や理解度を考えながら伝える経験につながることに意義がある。中学生が小学生に教える経験は、自分の役割や存在価値を実感する機会にもなる。誰かに必要とされたり、誰かの

	学校区の職員同士で集まっての研修会を開催しており、生徒指導・地域・学力向上・ICT の４部会で行っている。 〇中学校がインクルーシブ教育推進協力校になっているので、特別支援コーディネーターと連携している。今年は通級の子たちの引き継ぎについて検討している。日常的に中学校の目線で６年生を見てもらい、引き継ぎをより良くできるようにしている。	成長を支えたりする経験は、自己肯定感や他者への関心を育てる上でも意味がある。（大曽根委員） 〇異なる世代や専門性を持つ人との接点が生まれることは、児童の視野を広げるとともに、多様な人との関わりを経験する機会となり得る。いじめ防止の観点からも、学校内の人間関係だけに閉じるのではなく、地域や大学を含めた多様な人との関係を持つことは、自分の世界を広げ、異なる考え方や価値観に触れる機会として意義がある。今後、大学の専門性や学生の力をどのように学校教育や地域活動につなげていくのかに注目したい。児童が大学生と継続的に関わりながら学ぶ機会が生まれれば、異なる世代との対話や協働を通じて、互いの違いを理解する力を育てる場として発展する可能性がある。（大曽根委員） 〇地域社会で安心して成長することができるように、また、これからの少子高齢化の影響をうける地域社会と学校との協働に備えた対応が伴っていると感じた。（本図副会長） 〇中学校区での活動が定型化していることは、これからの少子高齢化のなかで極めて重要な取組であると感じた。（本図副会長） 〇通級のこどもたちの情報共有について見直しや改善を図り、漫然とした学校経営を良としていないことは重要である。（本図副会長）